



「しおり」のはなし

秋の気配も深くなり、本が読みやすい季節になりました。

みなさんは本を読むのを中断するとき、どうしていますか？ 本を読んでいる途中で“どこまで読んだか”を覚えておくために使う目印が「しおり」です。ちなみに、しおり代わりに使われるもので一番多いのはレシートだそうです。

しおりは、本の誕生とともに生まれたといわれるくらい歴史があります。

かつて中国や日本では、木簡^{もっかん}というすだれのようなものに字を書いていた。この木簡のしおりに使われていたのが、「籤^{せん}」と呼ばれる竹や木の札です。木簡を丸めたものに、籤^{せん}を挿^さして使いました。

平安時代に書かれた『枕草子^{まくらのそうし}』には、「夾算^{きょうさん}」をしおりとして使っていたとあります。夾算とは、竹や木片を長さ9cm、幅1.5cmくらいに薄く削^{けず}ったものを裂^さき割^{わり}して上部を糸などで巻き結んだものです。これを読みかけの箇所^{か所}に挟^{はさ}んで使っていました。

「しおり」の語源

昔、村人が山道などで、帰路^{きろ}の道しるべとして木の枝を折りかけたものを枝折^{しおり}といいました。しおりは道しるべの枝折が語源と言われています。

江戸時代のはじめに、水戸黄門が、硬い紙^{かた}を芯^{しん}にして絹織物で包んだ物を“ご本を読むのにお使いください”と、後水尾天皇^{ごみずのおてんのう}に献上^{けんじょう}しました。これを天皇はいたく気に入られ、西行^{さいぎょう}の歌「吉野山こぞの枝折りの道かへてまだ見ぬかたの花をたづねむ」から“枝折^{しおり}”という名を贈ったというエピソードがあります。

(『茅窓漫録^{ぼうそうまんろく}』茅原虚斎^{ちはらきさい} 著 1883年より)

*西行：平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての日本の野節・僧侶・歌人。

しおりひも「スピン」のはなし

本の背表紙の上部にくっついている、しおり紐^{ひも}を「スピン」と呼びます。

このしおり紐をスピンと呼んでいるのは、日本だけです。なぜ日本だけでスピンとよばれているのかは、よくわかっていません。

一説には、英語で本の背をスパインと呼ぶのを、明治時代に日本で西洋風の本を作りはじめた時に、しおりひものことをまちがってスパインと呼びはじめたことが始まりと言われています。

2025年の読書週間の標語は「こころとあたまの、深呼吸。」です。

深呼吸して読みたい本はこちらのパスファインダーで案内しています。

ぜひ見てください。



世界のしおり(ブックマーク)のはなし

かつてキリスト教社会では、書物といえば聖書でした。

初期のしおりは、聖職者が聖衣の一部を挟んだことからうまれたのでは?と考えられています。

現在もキリスト教用具店で売られている教会用しおりは、神父などがつけているストラ(礼拝の際に使用する、首から掛ける帯)を小さくしたものです。



1455年にグーテンベルクが印刷した『四十二行聖書』の中の慶應義塾図書館が所有している1冊には、固定ボタン型ブックマークがついています。こちらから画像が見られます。

https://www.lib.keio.ac.jp/collection/rarebooks_mita/gutenberg.html



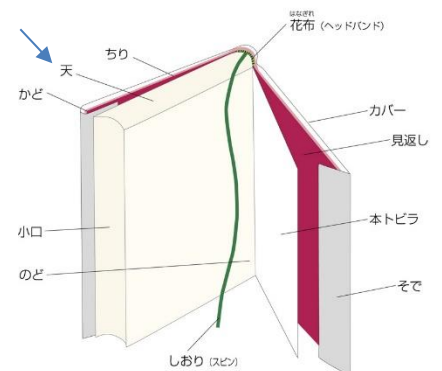
17世紀から19世紀末まで、多くの本は印刷された紙を折りたたんだままで切らないアンカット状態で販売されていました。袋とじを開くために用いられたペーパーナイフが、そのまましおりとしても活用されていたといえます。

アンカット本のはなし



並製本(文庫本・新書本などのソフトカバー本)は、袋とじで本の形にした後、天・地・小口を断裁して、ページを開きます(三方断裁)。葉紐(スピン)を付ける場合には、工程の最初に取り付けを行う必要があるために、天の断裁ができません(天安カット)。天安カットは三方断裁よりコストが高く、さらに葉紐取り付けにかかる工賃も必要なため、最近では葉紐をやめて三方断裁し、代わりに短冊の紙片をしおりとして入れるものが増えています。

文庫本の上がガタガタしているのは、天安カットだからです。不良品というクレームが出版社に来るという話ですが、実は手間とコストがかかっている製本方法なのです。



しおりが出てくる小説

『葉と嘘の季節』 米澤穂信 集英社

高校の図書委員の二人の男子、堀川と松倉が身近に起こる謎を解いていく物語です。

しおりにまつわる謎を解くのですが、このふたりのやりとりや距離感が絶妙です。

『本と鍵の季節』の続編です。ぜひこちらから読んでみてください。

『葉の恋』 朱川 湊人 新潮社

『かたみ歌』の中に入っている短編です。

1967年、まだ携帯もインターネットもない時代。古本屋の本のなかに挟んだしおりを使ってやり取りをする話です。TV『世にも奇妙な物語』でドラマ化されました。

